

隠れたところにおられる父

あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。

—マタイ福音書 6 章 6 節

アメリカの同時多発テロ事件から一年、以来宗教がうんぬんされることが多くなった。宗教とは何か。神とはいかなる存在か。

聖書は神の存在を証明したり、神を定義しようとしたりしない。しかし、神はいかなる存在かについては十分に、明快に語っている。「山上の説教」の中のイエスの言葉（マタイ福音書 6 章 1 ～ 18 節）などは、その代表的なものだろう。

その箇所ではイエスは、神を「天におられるわたしたちの父」（新共同訳、以下同じ）と呼び、その父は「隠れたところにおられ、隠れたことを見ておられる」方だと言っている。神の属性の一つは「隠れている」ことだといふのである。素朴極まりないが、また深遠極まりない神の説明（神観）と言うべきだろう。

ところで、聖書はまたこの「隠れた」という形容詞を、人間についても全く同じように用いている。「人々の隠れた事柄」「心の内に隠していたこと」、特に「内面的な人柄」などと。その言うところは、人間は皆ひとりひとり「隠れた事柄、心の秘密」を持っている、「内面的な人柄」こそが人間存在の根底にあるものだということである。

「隠れたところにおられる」神は、その息（霊）を吹き入れて人を「生きる者」とされたという（創世記 2 章 7 節）。人にも「隠れたところ」を造られたのである。これを「心」と言い、あるいは「内面」その他何と呼ぼうと、このような言わば「心の奥殿」「靈魂の聖所」を持っていることが、人間が人間であるゆえんであり、生命の重さと人間の尊厳の淵源であり、個人の価値（人権）の根拠なのである。

「隠れたところにおられる」神は、それゆえに、人の「隠れたところ＝内面的な人柄」に向かって絶えず愛の呼びかけをしておられる。これに対して人もまた、心の秘密を開き聖所の幕を上げて、「隠れたことを見ておられる」神に応答する。この神と人との「結びつき」（religionの語義という）こそが「宗教」と呼ばれるべきものであろう。聖書はこれを「信仰」と言うが。

では、このような宗教（信仰）は、どのような霊性ないしは倫理を生み出すだろうか。

第一は「畏れ」である。人間を超える存在に対する畏怖の念である。

こちらからは決して見えないが、自分はいつもある存在に見られている。「嘘をつくな、お天道様が見ておられる」「かんじんなことは目に見えないんだよ」（星の王子さま）。これは素朴だが、人間にとって無くてはならない尊い感情ではないか。聖書も「神は人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる」と言って、人の「内面」は神のみが知り給うこと、神は畏るべき裁きの神であることを告げる。



鈴鹿海軍航空隊にて二等飛行兵曹任官時
18才の筆者（1945年6月）

現代はおよそ「畏れ」を知らない時代だ。あらゆる分野で虚偽と欺瞞が横行する。犯罪もテロも戦争もますます残虐になる。社会の崩壊と環境の破壊は止まるところがない。畏れを知らない人類は、自ら「神」となって、傲りの中に自滅していくのではないかと恐れる。

第二は「慎み」である。畏れを知る者は慎み深くならざるを得ない。

慎みは決して一つの消極的な徳目ではない。聖書にしばしば「慎み（深い）」と訳されている語の原意は、「酔っていない、しらふである」という。醒めた意志を持って現実を直視し、事の本質を洞察する。強靱な精神を持って状況を熟慮し、柔軟、公正に事態に対処する。慎んで生きる、

とはそうした生き方を言うのであろう。それは、世の疑似宗教やカルトなどが人を誘う宗教的^{ファンタジズム}狂信や、宗教的^{エクスタシー}陶醉とは全く無縁のものである。

慎みのない世界は万事に過剰で、徒らに騒々しい。現代人は有り余るモノに押し潰され、溢れる情報に押し流されて、飽くなき欲望の中に、思慮も分別（いずれも「慎み」の別訳）もなく、酔い痴れているように見える。

第三は「優しさ」である。人と人の間に「平和を実現する」柔和な心である。

「隠れたところにおられる」存在は、確かに人の内に畏れ（の感情）を生むが、同時に、いついかなる時にも自分を見（守っ）ている存在がある、という安心を与えてくれる。この「永遠の目」の自覚が、人に望外の充足と平安と喜びをもたらすのである。その時人は最早他人の目を気にしないばかりか、自分で自分を裁くこともせず、あるがままの自分を受け容れて、自立（律）・自尊の人間となる。これをしも「癒し」と言い、「救い」と言う。

聖書は「隣人を自分のように愛しなさい」と命ずるが、自立的人間は自分の隣人もまた、彼がどのような人であれ、自分と同じ「内面的な人柄」を持つ人間であることを発見する（聖書はこれを「出会う」と言う）。この自他に対する確かな信頼こそが、人を本当の意味で優しくするのではないか。

「優しさ」とは、それゆえ、人間であることの悲しみを知ることであり、憂いを持つ人の傍らに黙して立つことであり、互いに尊敬の念と繊細な情を交わすことであり、寛容と理解をもって互いを受け容れることである。「共に生きる」とはそうした生き方のことであらう。

人間の価値を「内面的な人柄」によるのではなく、外に現れた見えるもの—財産、能力、学歴、肩書きなど—だけで評価してしまう現代人は、当然のことながら、急速に優しさを喪失しつつある。

以上私は、「これがイエスの提示した宗教である」と私自身が考えるところを、人の生き方と生活の問題として述べてみた。

宗教とは何か。それが何であるにしても、人間存在を規定し、文化・文明の基礎をなす大切なものであることは確かである。だからこそ、私どもは誰でも、真の宗教は何かを問い続けなければならない。

(2002 年 9 月 15 日)

(所載) 雨宮剛編『青山学院と戦争体験の継承』

2003 年 12 月